

教導者釈尊と魔

大阪大学インド学仏教学研究室

真宗文化研究所研究員

古 川 洋 平

はじめに¹

かつて筆者は、拙論古川〔2014〕にてパーリ聖典中の『スッタニパータ』の一経『精勤経』(Sn 425-449)を扱った。本経には、安穩に達するために死を覚悟して修行に励む釈尊に「生きてこそである」と還俗を迫る存在として māra (以下、「魔」と表記)が登場する。その際釈尊は、魔の誘惑をはねのけて魔の軍勢を退散させている。本伝承は、後世の仏伝に見られる降魔成道のモチーフの一つとして、聖典においても印象的な位置を占めている。一方、同じく釈尊の「死」を伝える『涅槃経』(D 16)において、釈尊に入滅を勧めているのも、魔である。筆者は、『精勤経』と『涅槃経』に見られる「生」と「死」に関する魔の態度の違いをきっかけとして²、パーリ聖典における魔の性格に興味を抱いた。

『涅槃経』において釈尊は、「四神足を有する自分が望むならば、一劫あるいはそれ以上の間留まることが出来る (つまり延命できる)」(趣意)と侍者アーナンダに三度語っている。しかし、その際アーナンダは、魔により心が纏わり付かれている者の様に³、釈尊に延命を乞わなかった⁴。釈尊はアーナンダに下がるように言う。するとそこに魔がやってきて、「君にかつて (成道後間もなくの頃) 涅槃を勧めた時、君は『①四衆 (比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷) が導かれて教法を理解し、実践し、法を説くようになるまでは般涅槃しない、②君の説いた梵行 (brahmacariya) が多くの人々に明らかにされ、広まるまでは般涅槃しない』と言ったが、今やその通りになっている」(趣意)とし、今こ

そ涅槃の時であると語る。直後に釈尊は魔の言葉を受ける形で三ヶ月後の般涅槃を宣言し、自身の寿命の形成力 (āyu-saṅkhāra) を放棄する (D II, pp.102-106)。

以上が『涅槃經』における釈尊が入滅を決意する部分の概要であるが、入滅の決意に際しては、魔の言葉が大きなきっかけとなっていることが分かる。この点に関して井上 [2000] は、ここに登場する魔が聖典内に通常見られる釈尊に対峙して敗北する者でない点を疑問視し、他の涅槃經類とは異なり魔が歓喜して去る記述がパーリ『涅槃經』に無い点から、パーリ『涅槃經』が独自の伝承意図を持っていたと解している。しかしながら、氏の魔に対する理解は面的であり、パーリ聖典中の魔の立場に即した理解が十分であるとは言えない。本論では、聖典における魔の用例を整理することを通じて、上述の『涅槃經』における魔の行動の意図を探ってみたい⁵。

パーリ聖典における魔については、いくつかの勝れた先行研究がある。Windisch [1895] は仏伝に登場する魔と釈尊のやりとりを収めたいくつかの経をパラレル文献を含め取り扱い、聖典中の魔の神話の歴史的発展を考察することで、仏教における魔研究の嚆矢となった。Ling [1962] はパーリ聖典中の魔を神話的な悪の象徴として捉えており、本書の Appendix は今尚有益である。Boyd [1975] は広くインド仏教文献に見られる魔の用例から仏教における悪しきもののシンボルとしての魔を描き出し、キリスト教のサタンとの比較研究を行っている⁶。本邦の魔研究について言えば、魔を「旧来の社会的基盤に依存する古い伝統的なイデオロギーと新しい社会的基盤から生まれ出た萌え出る思惟との対立抗争の反映」と見たり (中村 [1992: 299-300])、当該者 (特に釈尊) の「精神的葛藤」の反映と見る視点が認められるが (石上 [1970: 51-52])、網羅的な用例整理に基づいた魔の行動の意図や目的を明らかにしていく試みは、これまで進められたことはないようである⁷。

以下、本論では、まず聖典に見られる魔の特徴を簡潔に指摘していくことで、聖典における魔を考察するにあたっての問題点を確認していく (⇒1)。次いで、説法をめぐる釈尊と魔の対話を通じて魔の妨害行為の理由の一端を明ら

かにし、『涅槃経』において魔が釈尊に涅槃を勧める意図に関して一言したい(⇒2)。

1. パーリ文献における魔の分類と特徴

インド仏教において、魔には「四魔」あるいは「五魔」といった分類が伝統的に使用され、パーリ聖典を伝承した上座部大寺派では後者が用いられている(Vism p.211)⁸。今、Vism 中の5つの魔に対する註釈説明を提示すると、以下のようになる。

〈用例①〉

sampati āyatiñ ca sattānaṃ anattāhavaḥattā māraṇaṭṭhena vibādhanattṭhena kilesā va māro ti *kilesamāro*. vadhakaṭṭhena khandhā va māro ti *khandhamāro*. tathā hi vuttaṃ “vadhakaṃ rūpaṃ ‘vadhakaṃ rūpaṃ’ ti yathābhūtaṃ na ppajānātī” ti ādi. jātijarādimaḥābyasananibbattanena abhisankhāro va māro ti *abhisankhāramāro*. saṃkilesanimittaṃ hutvā guṇamāraṇaṭṭhena devaputto va māro ti *devaputtamāro*. sattānaṃ jīvitassa jīvitaparikkhārānañ ca jānikaraṇena mahābādhārūpattā maccu eva māro ti *maccumāro*. (Vism-mhṭ (Be) I, p.255 (ビルマ第六結集版 CSCD を使用))

今と将来、存在者達に不利益をもたらす事から、死なすという意味で、妨害するという意味で *māra* が煩惱に他ならないということで *kilesamāra* (煩惱魔)である。加害者という点で *māra* が〔5つの〕部類(蘊)に他ならないということで *khandhamāra* (蘊魔)である。〔〔人〕加害者である物質(色)を『物質は加害者である』とありのままに理解しない〕(Cf. S III, p.114)等と言われているように。誕生・老い等の大きな災難を起こすという点で *māra* が〔行為の〕潜在力に他ならないということで *abhisankhāramāra* (行作魔)である。穢れ(*saṅkilesa*)に基づいてあって、美德を死なすという意味で *māra* が神の構成員に他ならないということで

devaputtamāra (天子魔) である。存在者達・生活・諸の生活用品を損失させるという点で、大きな障害という在り方たることから māra が死 (maccu) に他ならないということで maccumāra (死魔) である。

上掲例の5つの魔を示す用語はいずれも karmadhāraya で解されており、煩惱・五蘊・行作・神の構成員・死それぞれが魔であると説明されている⁹。そして、これらの魔の少なくとも一部は、聖典段階にまで遡ることが可能である。S 23.1 では、人が無常・苦・無我 (非我) であり「我がもの」等でないにも関わらずそうではないと考え取著してしまう物質 (色) 等の人間の構成要素、即ち五蘊の各々が魔であると説かれている (S III, p.189⇒「蘊魔」Cf. S I, p.112.)。また、本例では五蘊の各々を「殺す者」(māretar) とも述べており、魔 (māra) が√mr̥ (死ぬ) に由来することが確認される。

五蘊の項目それぞれが魔とされる一方、聖典中には人格的な存在や生存状態の一つと見なされる魔も登場する。前者に関して言えば、魔は Pāpiman, Maccu (⇒「死魔」), Namuci¹⁰, Kaṇha, Adhipati (⇒「支配力ある者」), Vasavattin (≠ 他化自在天¹¹⇒用例③下線部②), Antaka, Pamattabandhu¹² といった異名をもち、Taṇhā, Arati, Ragā という三人の娘がいる (S I, pp.124-127 etc.)。また魔は、釈尊やインドラと並置される形で支配力ある者 (ādhipateyya) 達のうちの筆頭とされる他 (A II, p.17⇒前出の Adhipati)、固有名を持つ魔も登場する¹³。さらに、Vin には「魔の集団に属する神格」(mārakāyikā devatā)¹⁴ という記述が認められ (Vin III, p.69)¹⁵、「魔」が神格の属する集団の一つとしても用いられている。これらの魔は人格的存在やその集団と見なし得、「天子魔」としての側面を表わしていると言えよう (その他「煩惱魔」「行作魔」については Sn 436-438, It, p.56, Nidd I pp.95-96 を参照のこと)。

上に取り上げている諸例に明らかなように、パーリ聖典中の魔の在り方は一様ではなく、一つのものに集約しようとする、そこには何かしらの齟齬が出てきてしまう。註釈中で用例①に提示した五魔の各々が使用される場合も、聖典に登場する魔 (単数) を「天子魔」「死魔」「煩惱魔」であるというように、

複数の分類を用いて説明する例が散見される (Sv III, p.846 etc.)¹⁶。パーリ聖典や聖典を伝承した上座部大寺派では、上で述べた魔の多様性を不自然なものとは見なしていなかったことになる。従って、魔を考察対象として見るにあたっては、上述の問題点を考慮に入れながら、あくまで文献に即して、文献に現われる魔を一定の性格を有する存在として扱い、魔以外のものとの関わりに注目しながら、その特徴を洗い出していくべきであろう。

2. 教導者釈尊と魔

2.1. 「魔相応」中の説法を妨害する魔とその目的

パーリ聖典中の魔の特徴を確認したところで、本論の目的である『涅槃經』における魔の行動の意図について考えてみたい。ポイントは、入滅の宣言の前に魔が語った、釈尊がかつて涅槃する条件として述べた仏弟子の教法の理解と実践、そして梵行の流布にある。この2点は、釈尊の説法を出発点としている。従って、教導者としての釈尊に対して魔がどのような態度を取っているのかに注目することで、理解の糸口が見えてくると考えられる。

『サンユッタニカーヤ』の第一篇「有偈品」「魔相応」(Mārasaṃyutta) には、釈尊や仏弟子と魔のやり取りが多く収められている。その中で魔はしばしば釈尊の説法中に現われ、説法を妨害している。「魔相応」に説かれている説法に関連する例は①説法者である釈尊当人を貶めたり悩ませるような発言(偈を含む)をするケース (S I, p.105, 110, 111, 123)、②釈尊の説法内容とは逆の立場の発言(偈を含む)をするケース (S I, p.106, 108, 109)、③変化した姿を見せたり、大きな音を立てたりして仏弟子の聞法を妨害するケースが認められる (S I, p.112, 113, 115)¹⁷。これらのケースでは、魔は仏弟子の「〔慧〕眼を失わせるために (vicakkhukammāya)」¹⁸ 偈によって語りかけたり¹⁹ 聞法を妨害しており、魔の行動目的が釈尊の他、仏弟子の修行を妨害することにもあることが分かる。

上に取り上げた3つのケースは、いずれも釈尊の説法時における魔の事例で

ある。「魔相応」の他の例では、説法時ではないにも関わらず他者への説法行為を批判する魔の事例が認められるので、次に検討する。

2.2. 事例 1：他者への教導を批判する魔

S 4.3.4-5 において、魔は 7 年間（註釈によると成道前 6 年、成道後 1 年）釈尊を追尾し攻める機会（otāra）を窺うものの、それを得られずにいた。そこで両者は、次のようにやり取りしている。

〈用例②〉

sokāvatiṇṇo nu vanasmim jhāyasi
vittaṃ nu jīṇṇo uda patthayāno
āguṃ nu gāmasmim akāsi kiñci
kasmā janena na karosi sakkhim
sakkhī na sampajjati kenaci te ti.

（魔）「君は憂いに沈んで森で瞑想しているのか？

あるいは財を失い求めているのか？

君は村で何かの罪を犯したのか？

何故に君は人と交わらないのか？

君には誰の友人も出来ないのか？」と。

sokassa mūlaṃ palikhāya sabbam
anāgu jhāyāmi asocamāno
chetvāna sabbam bhavalobhajappam
anāsavo jhāyāmi pamattabandhu.

（世尊）「憂いの根本をすべて引き抜いて、

私は罪なき者として憂えずに瞑想している。

生存に対する貪欲である欲求を断って、

漏れこむものなき者（漏尽者）として、私は瞑想している、現を抜かす者

たちの親族よ」。

yaṃ vadanti mama-y-idan ti ye vadanti maman ti ca

ettha ce te mano atthi na me samaṇa mokkhasī ti. (S I, p.123)

(魔)「①人々が『これは私のものだ』と語るもの（所有物）と、『私のものだ』と語る者達と、

もしこれらに対して君の思考があれば、沙門よ、君は私から解放されることはないだろう」と。

yaṃ vadanti na taṃ mayhaṃ ye vadanti na te ahaṃ

evaṃ pāpima jānāhi na me maggam pi dakkhasī ti.

(世尊)「人々が語るもの、それが私にはない。語る者達、彼等は私ではない。

悪しきものよ、君は以上のように知れ。君は私の道すらも見ることはないだろう」と。

上掲のうち下線部①では、質問者である魔自身が「我所有に関して思考があれば、私から解放されることはない」（趣意）と述べている（Cf. S I, p.112.）。この魔は、「蘊魔」としての性格を有しながらも、人格的存在として釈尊に語りかけていることになる。釈尊と魔のやりとりは以下のように続く。

sace maggaṃ anubuddhaṃ khemaṃ amatagāmināṃ

’pehi gaccha tvam ev’ eko kim aññaṃ anusāsasī ti.

(魔)「②もし〔君によって〕不死に赴く、安穩の道が覚られているのであれば、

君は離れよ。君一人だけで行け。どうして他人を教導するのか？」と

amaccudheyyaṃ pucchanti ye janā pāragāmino

tesāhaṃ puṭṭho akkhāmi yaṃ saccaṃ²⁰ taṃ nirupadhin ti. (S I, p.123)

(世尊)「③死の支配領域でないもの(不死)を問う、向こう側に赴く人々、
彼等に問われたならば、私は説明する。『真実なるもの、それは所有物(燃料)なきこと(=涅槃)である』と」と。

以下、上掲例において指摘出来る点を列挙する。

- ①上掲例は独座して瞑想する釈尊と魔の対話であり、周りには他に誰も居ない。
- ②魔は、釈尊が「漏尽者として魔から解放されている」(趣意)と答えると、説法を通じて他者を導くなど語っている(下線部②)²¹。
- ③魔の言葉に対して釈尊は、不死を問う者に対してはそれを説くと答えている(下線部③)。

上掲の例を含むやり取りの後、魔は「私は今や再び攻める機会を窺う者として世尊に近づくことが出来ない」²²と述べ、釈尊の元から去って気落ちし座り込んでしまう。その後、3人の娘が魔のもとにやってきて、「熱望という罠(rāgapāsa)により彼(釈尊)を縛って連れてくれば、君(魔)の支配下となるだろう(vasago te bhavissati)」と述べる。魔は「善逝(釈尊)は熱望によっては連れて来ることは出来ない。彼は魔の領域を超えている(māradheyam atikanto)」と答える。娘達は釈尊に近づき様々な方法で誘惑するが、果たして魔の言う通り、徒労に終わる(S I, pp.124-127)。

事例1に明らかなように、魔は今現在行われている釈尊の説法を妨害するだけでなく、他者への説法そのものを批判している。これは何故か。以下、事例2においてこの点を明らかにしたい。

2.3. 事例 2：梵天や弟子への説法を阻止しようとする魔

『梵天招待経』（M 49）は、梵天界での釈尊と梵天バカとの対話を内容としている。或る時、釈尊は梵天界の梵天バカに法を説くべく、梵天界に赴く。そこで魔は、二度に渡り梵天の眷属に属するもの（梵衆天）に入り込み（anu-āvis）、釈尊の説法を妨害しようとする²³。

〈用例③〉

atha kho bhikkhave māro pāpimā aññataraṃ Brahmapārisajjaṃ anvāvisitvā maṃ etad avoca: bhikkhu bhikkhu m' etam āsado m' etam āsado, eso hi bhikkhu Brahmā Mahābrahmā . . . tan tāhaṃ bhikkhu evaṃ vadāmi: ingha tvaṃ mārisa yad eva te Brahmā āha tad eva tvaṃ karoḥi, mā tvaṃ Brahmuno vacanaṃ upātivattittho. . . .

（釈尊）「すると比丘等よ、悪しきものたる魔が或る梵天の眷属に属する者（梵衆天）に入り込んで私にこう言った。『比丘よ、比丘はこの者（梵天バカ）を侮辱してはならない。この者を侮辱してはならない。というのも比丘よ、この者は梵天、大梵天であり、……（中略）……それで比丘よ、私は君に次のように言う、‘①さあ友よ、君は梵天が君に言う、まさにそのことを為せ。君は梵天の言葉を超えてはいけない。……’』」

evaṃ vutte ahaṃ bhikkhave māraṃ pāpimantaṃ etad avocaṃ: jānāmi kho tāhaṃ pāpima, mā tvaṃ maññittho: na maṃ jānātī ti. māro tvam asi pāpima. yo c' eva pāpima Brahmā, yā ca Brahmaparisā, ye ca Brahmapārisajjā, sabbe va tava hatthagatā, sabbe va tava vasagatā. tuyhañ hi pāpima evaṃ hoti: eso pi me assa hatthagato, eso pi me assa vasagato ti. ahaṃ kho pana pāpima n' eva tava hatthagato n' eva tava vasagato ti. (M I, pp.326 f.)

（釈尊）「このように言われて、私は悪しきものたる魔にこう言った、『悪しきものよ、知っての通り、私は君を知っている。君は ‘彼は私のことを知らない’ と考えてはならない。悪しきものよ、君は魔である。悪しきも

のよ、②梵天であれ梵天の眷属であれ梵天の眷属に属するものであれ、他ならぬすべての者達は君の手の内にあり、他ならぬすべての者達は君の支配下にある²⁴。③というのも悪しきものよ、君はこう思っているのだから、〔即ち、〕‘この者（釈尊）もまた私の手の内になるだろう、この者もまた私の支配下になるだろう²⁵’ と。しかしながら悪しきものよ、私は決して君の手の内になることはなく、決して君の支配下になることはない』と」

この後、釈尊は〔註釈によると自身と梵天のいる場所の〕恒常不滅を主張する梵天バカに対し、様々な点で自身の方が上であることを示していく。以下の記述は、釈尊とのやり取りを通じて梵天に稀有な気持ちが生じた直後の記述である。

atha kho bhikkhave māro pāpimā aññataram Brahmapārisajjam anvāvisitvā maṃ etad avoca : sace kho tvaṃ mārīsa evaṃ jānāsi, sace tvaṃ evaṃ anubuddho, mā sāvake upanesi, mā pabbajite, mā sāvakānaṃ dhammaṃ desesi, mā pabbajitānaṃ, mā sāvakesu gedhim akāsi, mā pabbajitesu. . . . tan tāhaṃ bhikkhu evaṃ vadāmi : iṅha tvaṃ mārīsa appossukko dīṭṭhadhammasukhavihāram anuyutto viharassu, anakkhātaṃ kusalaṃ hi mārīsa, mā paraṃ ovaḍāhi ti.

（釈尊）「すると比丘等よ、知っての通り、悪しきものたる魔はある梵天の眷属に属する者に入り込んで私にこう言った²⁶、『④友よ、知っての通り、もし君が以上の〔梵天に語った〕ように知り、もし君が以上のように理解しているのなら、君は弟子達を導くな²⁷。君は遊行者達を〔導く〕な。君は弟子達に教法を説示するな。遊行者達に〔教法を説示する〕な。弟子達に対して強欲を作るな。遊行達に対して〔強欲を作る〕な。……（中略）……それで比丘よ、私は君に次のように言う、‘⑤さあ友よ、君は気兼ねなく現世を楽に過ごすことに専念する者として時を過ごせ。というのも友よ、説かない方がよいのだから。君は他者を教戒するな’ と』〔と〕」

evaṃ vutte ahaṃ bhikkhave māraṃ pāpimantaṃ etad avocaṃ : jānāmi kho tāhaṃ pāpima, mā tvaṃ maññittho : na maṃ jānātī ti. māro tvam asi pāpima, na maṃ tvaṃ pāpima hitānukampī evaṃ vadesi, ahitānukampī maṃ tvaṃ pāpima evaṃ vadesi. tuyhañ hi pāpima evaṃ hoti : yesaṃ samaṇo Gotamo dhammaṃ desessati, te me visayaṃ upātivattissanti ti. (M I, pp.330 f.)

(釈尊)「比丘等よ、このように言われて、私は悪しきものたる魔にこう言った、『悪しきものよ、知っての通り、私は君を知っている。君は‘彼は私のことを知らない’と考えてはならない。悪しきものよ、君は魔である。悪しきものよ、君はためを思っただけで同情する者として私に以上のように語ったのではない²⁸。悪しきものよ、君はためを思っただけで同情する者するものではなく、私に以上のように語った。というのも悪しきものよ、君は次のように思っているのだから、〔即ち、〕‘⑥沙門ゴータマが彼等に教法を説示する、その彼等が私の領域を超えていくだろう’ と』〔と〕」

以下、事例2において指摘出来るポイントを整理し、『涅槃経』における魔の行動の意図について考えてみたい。

- ①上掲例において、梵天さえも支配下に置く存在とされる魔は（下線部②）、釈尊に対して梵天の言葉を超えるな、つまり梵天の言う通りにせよと語っている（下線部①）。これに対し釈尊は、魔に支配されることはないと答えている（下線部③）。
- ②釈尊が魔の支配の及ばない者だと語ると、魔はその場にいない弟子や遊行者達を教導するなどと述べる（下線部④⑤）。
- ③その理由は、釈尊の説法を聞いた者が自分の領域を超出してしまい²⁹、自分の支配が及ばない者が出てくるためである（下線部⑥ ⇒注23）。

2.4. 『涅槃経』における魔の行動の意図について

本節において筆者は、説法行為に関わる釈尊に対する魔の行動の意図に2つ

の側面が認められることを指摘した。魔が釈尊の説法を妨害する背景には、①釈尊自身が魔の領域を超えること（超えたままであること）を妨害するだけでなく、②釈尊の教導対象（仏弟子。魔にとっては支配対象）が自身の支配領域を超えることを防止するという意図がある。先に取り上げた2つの事例において、魔はまず釈尊当人を妨害し、そしてそれが叶わなければ、釈尊が他者を教え導く行為を妨害しようとしている。また事例1において、魔は釈尊とのやり取りの後、釈尊当人を攻める機会を再び得ることができないと考えており、『涅槃經』において魔が上掲①を目的として涅槃を勧めている可能性は低いと考えられる。

以上を総合して『涅槃經』における魔が涅槃を勧める意図を考えると、魔の行動の背景には、釈尊が延命し引き続き仏弟子を教導することで、仏弟子が仏道修行を實踐し、自身の支配領域を超えていくことを防ぐ意図があったと考えるのが自然である³⁰。従ってそこには井上〔2000〕が主張する、あるべき「敗北者としての魔」も、他の涅槃經類とは異なるパーリ『涅槃經』独自の意図も、想定する必要はない。

まとめ

以下、本論で指摘した点を列挙していく。

- ①パーリ聖典中の釈尊と魔の対話を精査すると、その場にはいない釈尊が教え導く対象、即ち仏弟子に対する態度や行動に関することにも取り上げられる。
- ②魔が釈尊の行動（特に説法）を妨害する背景には、釈尊当人が魔の領域を超えることを阻止することの他、釈尊の説法を通じて聞法者が魔の領域を超出することを阻止する意図がある。
- ③諸例を踏まえると、『涅槃經』において魔が釈尊に涅槃を勧める背景には、釈尊当人を支配下に置くためではなく、釈尊の教導対象（仏弟子）がこれ

以上自身の領域を超えていくことを阻止するという意図が働いていると考えられる。

以上の点は魔の行動動機として常識的に想定される範囲を出るものではないが、それを文献に即して指摘できたことに意味があると考ええる。説法をめぐる釈尊と魔のやりとりに注目すると、魔の行動対象は釈尊以外の者にも向けられていた。その動機は自身の領域の支配を強く意識したものであり、自身の支配領域を超えてしまう可能性がある対象に対しては、それを阻止しようと様々な行動を起こしている。そこには、単なる敗北者や妨害者ではない、魔の領域支配者としての性格が強く浮かび上がっていると言えるであろう。

参考文献一覧

- 石上 [1970] 石上 善應,「相応部有偈篇に現われた仏伝について ——とくに重要事件に限定して——」,『三康文化研究所年報』, 3, pp.41-67.
- 井上 [2000] 井上 博文,「パーリ『涅槃經』に説かれるマール」,『パーリ学仏教文化学』, 14, pp.79-86.
- 岩井 [2009] 岩井 昌悟,「マールの變容 ——死魔から他化自在天へ——」,『印度學佛教學研究』, 58-1, pp.364-359.
- 大野 [1990] 大野 栄人,「仏教における「魔」の考察」,『愛知学院大学文学部紀要』, 20, pp.427-413.
- 金谷 [2013] 金谷 昭,「仏伝における「悪魔」についての一考察」,『人間幸福学研究』, 5-2, pp.60-102.
- 桜部 [1984] 桜部 建,「J. W. ボイド『サタンと魔 ——キリスト教および仏教の邪惡のシンボル——』」,『佛教学セミナー』, 40, pp.62-66.
- 中村 [1992] 中村 元,『ゴータマ・ブッダ I 原始仏教 I』,中村元選集〔決定版〕第11巻,春秋社.
- 名和 [2017] 名和 隆乾,「パーリ聖典における cha- Xkāyaについて」,平成28年度第2回バウッダコーシャ研究会発表配付資料,2017年3月11日.
- 古川 [2014] 古川 洋平,「パーリ註釈文献における saddhā の一側面 ——okappanasaddhā に注目して——」,『東洋哲学研究所紀要』29, pp.196-178.
- 『声聞地』 声聞地研究会,『瑜伽論 声聞地 第二瑜伽処』,大正大学総合佛教研究所,山喜房仏書林,2007.
- Boyd [1975] Boyd, James W., *Satan and Māra: Christian and Buddhist Symbols of Evil*, Leiden: E. J. Brill.

- DPPN Malalasekera, G. P., *Dictionary of Pāli Proper Names*, 2 vols., London : PTS, 1938.
- Ling [1962] Ling, T. O., *Buddhism and the Mythology of Evil : a Study in Theravāda Buddhism*, London : Allen & Unwin.
- Windisch [1895] Windisch, Ernst, *Māra und Buddha*, Leipzig : S. Hirzel.

註

- 1 本論中のパーリ語テキストは用例①を除き Pali Text Society (PTS) 版 (Ee) を底本とし、略号は *A Critical Pāli Dictionary* (CPD) の Epilegomena に従っている。原文の異読は必要最低限のもののみ取り上げている。
- 2 その他、魔が自死しようとする仏弟子ゴーディカを止めるよう釈尊に語る例も確認される (Cf. S I, pp.120 f.)。
- 3 魔は時に人や神格に入り込んだり (anu-ā-√vis)、纏わりつく (pari-ud-√sthā)。前者の場合、人 (神) は魔の思いのままに行動し、後者の場合、適切な行動が取れない (D III, p.57)。
- 4 アーナダ自身は、この際自分の心が魔に纏わりつかれていたと述べている (Vin II, p.289)。
- 5 『涅槃經』における釈尊の涅槃の意味に関してはこれ自体が大きな問題であるが、本論では取り上げない。
- 6 Boyd [1975] の概要については桜部 [1984] を参照頂きたい。
- 7 中村元氏をはじめとする研究者の魔に対する視点とその問題点については、金谷 [2013 : 73-77] が整理している。
- 8 その他、Nidd や蔵外文献にも様々な魔が列挙されるが (Nidd II p.227, Nett p.86)、ここでは取り上げない。
- 9 5つの魔のうち「行作魔」を除く四魔に対する説明は『声聞地』にも見受けられ、karmadhāraya で解されている点は異ならない (『声聞地』 pp.262-265)。漢訳文献における魔については大野 [1990] が取り上げている。
- 10 *Namuci* ti māro. so hi attano visayā nikkhamitukāme devamanusse na muñcati, antarāyaṃ nesaṃ karoti, tasmā “*Namuci*” ti vuccati. (Pj II, p.386) 「*Namuci* とは *māra* である。というのも、彼は自分の領域から出ていこうと欲している神々や人間達を解放せず (*na muñcati*)、彼等に障りをなす。それ故に *Namuci* と言われる」
- 11 三十三天・夜摩天・兜率天・樂變化天・他化自在天 (いずれも欲界の神) は「欲望という縛るもの」(*kāma-bandhana*) により縛られ、再び魔の支配下となる (S I, p.133)。また、後世、魔は他化自在天 (欲界の最上天・第六天) に住すると解される (Sv II, p.689. Cf. 岩井 [2000 : 363])。
- 12 Cf. Sv II, p.555, Spk I, p.169, III, p.252, Mp IV, p.150, Pj II p.44.
- 13 M 50 では、目連が魔に対し「昔、私は *Dūsin* という名の魔であった」と語っている (M I, p.333)。
- 14 複合語の後分を使用される *kāya* の理解については名和 [2017 : 11-12] を参照頂き

たい。

- 15 その他 Cf. Ap I, p.28 [1-198] : ... mārakāyikā ...
- 16 凡その用例に関しては DPPN sv. Māra に指摘されている。
- 17 「魔相应」の構成と内容については Ling [1962 : 117-128] が整理している。
- 18 *vicakkhukammāyā* ti, parisāya paññācakkhūṃ vināsetukamyatāya. Buddhānaṃ pan' esa paññācakkhūṃ vināsetuṃ na sakkoti, parisāya bheravārammaṇaṃ sāvento vā dassento vā sakkoti. (Spk I, p.176) 「vicakkhukammāya とは、取り巻き（仏弟子）の慧眼を除くために。一方、彼（魔）は諸仏の慧眼を除くことは出来ない。〔魔は〕取り巻きに恐れの対象を聞かせるか、あるいは見せることが出来る」
- 19 *ajjhabhāsī* ti, ayaṃ attanā viriyaṃ katvā, arahattaṃ patvā pi na tussati. idāni aññesaṃ pi pāpuṇāthā ti ussāhaṃ karoti. paṭibhessāmi naṃ ti cintetvā abhāsī. (Spk I, p.171) 「ajjhabhāsī とは、「この者（釈尊）は自ら勇敢に行動して阿羅漢果に達したのに満足せず、『今や他者達にも〔阿羅漢果を〕獲得させよう』と努力している。私は彼を阻止するでしょう」と考えて語った」
- 20 Ee (Feer 版) sabbam; Ee (Somaratne 版) Be Se saccam. 異読を採る。
- 21 他者を導くべきではないという趣旨の魔の言葉は S 3.2.4 (S I, p.111) にも認められる。
- 22 ... abhabbo c' idānaṃ Bhante puna Bhagavantaṃ upasankamituṃ yad idaṃ otārāpekho ti. (S I, p.124)
- 23 註釈に依れば、魔は釈尊の教えを聞いた梵天衆が自身の領域を超えることを阻止しようとしている。
... “samaṇo Gotamo Brahmaloṇaṃ gacchati, yāva tattha dhammakathaṃ kathetvā Brahmaṇaṃ mama visayaṃ nātikkaṃmeti, tava gantvā dhammadesanāya vicchandaṃ karissāmi” ti . . . (Ps II, p.405)
(魔) 「沙門ゴータマは梵天界に行っている。〔ゴータマが〕法話を説いて梵天衆が私の領域を越えないうちに〔私はゴータマのもとに〕行って法の説示に対する意欲をなくさせるとしよう……」
- 24 Cf. Sn 443 ab : yaṃ te taṃ na-ppasahati senaṃ loka sadevako.
- 25 釈尊を自身の支配下に留め置こうとする記述は、後世の『ニダーナカタール』にも認められる。
tasmaṃ samaye māro devaputto “siddhatthakumāro mayhaṃ vasaṃ atikkamitukāmo, na dāni 'ssa atikkamituṃ dassāmi” ti mārabalassa santikaṃ gantvā ... (Ja-a I, p.71)
〔菩提樹の元で覚りを決意した釈尊を見て〕その時神の構成員である魔は「シッタッタ青年は私の支配を超えようと欲している。今彼が超えるのを私は許さない」と〔考えて、〕魔の軍隊の側に行って……
... atikkanto dāni esa mama vasaṃ ti ... (Ja-a I, p.78)
(魔) 「〔釈尊の成道後つけ狙うも隙を見つけれずに〕この者は今や私の支配を超えている……」
- 26 註釈によると、魔は自身が離れている間に 1 万の梵天達が私の支配を超えてしまっ

た」と考えて梵衆天に入り込んだ (Ps II, p.415)。

27 *tattha, sace tvam evam anubuddho ti sace tvam evam attanā va cattāri saccāni anubuddho. mā sāvake upanesī ti gihisāvake vā pabbajitasāvake vā taṃ dhammaṃ mā upanaya.* (Ps II, p.415) 「そのうち、*sace tvam evam anubuddho* とは、もし君が以上のように自分だけで4つの真実(四諦)を覚っているのであれば。*mā sāvake upanesī* とは、在家の弟子達あるいは出家の弟子達をその真理に導くな」

28 参考例: *puriso anattakāmo ahitakāmo ayogakkhemakāmo ti kho bhikkhave māraṣṣ' etaṃ pāpimato adhivacanaṃ.* (M I, p.118) 「[比喩の後で] 知っての通り、利を欲せず、利益を欲せず、安穩を欲さない男というこれは悪しきものたる魔の同義語である」

29 パーリ聖典によれば、「現世の諸欲〔の対象〕とあの世の諸欲〔の対象〕」「現世の諸欲に対する表象とあの世の諸欲に対する表象」が魔の支配領域 (*māradheyya*)・魔の領域 (*māraṣṣa visaya*)・魔の餌場・魔の活動領域とされる (M II, pp.261 f. Cf. Ps IV, pp.57 f.)。ただし、註釈には魔の支配領域を三界とする理解も認められる (Spk I, p.178)。

30 Ling [1962: 99] は魔が涅槃を勧める背景には覚りの智慧が流布することに対する危惧があると考えているが、具体的な根拠を示しているわけではない。